
PHANTASY STAR GANTZ PERFECT ANSWER

オンドゥル侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P H A N T A S Y S T A R G A N T Z P E R F E C T A
N S W E R

【Nコード】

N O O 1 4 T

【作者名】

オンドウル侍

【あらすじ】

ある日、売れっ子ニュースキャスターのハルのもとにガンツをそのまま小さくしたような黒いボールが届けられた。不気味に思ったハルは捨てるが、次の朝目を覚ますと、捨てたはずのボールが彼女の手に握られていた。

すべてはこれが始まりだった。

アダムはエミリアとともに、ユートの遺志をついで『仲間を失わない戦い』を続けていた。しかし、かつてガンツを卒業したメンバ

I が謎の復活をし、そしてユートの不可解な復活、ガンツの周囲を嗅ぎまわる謎の男の出現し、ガンツの何かが狂い始める……

PSG の続編です。更新は恐ろしく不定期。

ANSWERマイナス1 プロローグ

ハルは夜道を、自宅に向けて歩いていった。

今日はニュース番組にドラマなど、さまざまな仕事でくたくただった。まあ、最近はいつものこうだ。売れるというのはそういう事だという事は彼女自身分かっていた。

自宅のあるマンションに着くと、郵便受けから新聞と購読している雑誌を引っ張り出す。と、彼女は郵便受けの奥に小ぶりの箱が入っていることに気付いた。取り出して振ってみると、カタカタとなった。彼女はそれが自分あてもろくすっぱ確認せずに抱えようと、部屋に向かった。

部屋で開けてみると、中にはヤ・キュウ・ボールより少し小さいくらいの黒い小さいボールが入っていた。艶消しブラックのカラーリングが、存在感を与えている。

ハルはしばらくそれを眺めていたが、やがて関心を無くしてゴミ箱に放り込んだ。早くベッドに潜り込みたい。彼女はそれだけ考えていた。明日は久々の休み。働くのは嫌いではないが、それでも休みはありがたかった。

寝巻にだけ着替えてベッドに潜り込んでから、彼女がまどろみに入るまで、そう時間はかからなかった。ああ、くたびれた。

次の日、顔に差す朝日でハルは目覚めた。気持ちのいい目覚めで体を伸ばすと、違和感が感じられた。掛け布団をはねのけた彼女はギョツとなった。

服を着ている？靴を履いている？

それだけではない。彼女は何かを握っていた。恐る恐る顔の前で

手を開くと、その手に握られていたものは、昨日捨てたはずの黒いボールだった。悲鳴とともに布団の上に放り投げる。

「ひあつ？」

すると、球の表面に、へたくそなニューデイズ語で何かのメッセージが映し出された。何故か彼女はそのメッセージから目が離せなかった。

昨日の夜はお疲れさま　一つ目の鍵は受け取りました

すぐにメッセージが入れ替わる。

部屋への鍵は四つ　次はこの方だす

めい　特徴　あたまいい　好きなもの　優等生

その朝のハルの記憶は、そこで途切れていた。

キャラ紹介（前書き）

主要人物を紹介します。

キャラ紹介

アダム・マクスウェル

ヒューマン 男性 21歳 ポジション：玄野

民間軍事会社リトルウイングに所属する青年。本作の主人公。原作におけるプレイヤーキャラ。高い戦闘能力に加えて人当たりが良く仲間思いで、社内での人気は高い。

エミリアとともにディ・ラガンに殺されガンツに召喚される。その戦闘力からミッションにいち早く適応し、ガンツの世界に自分の居場所を探そうとする。一時はユートを失った悲しみで自暴自棄になるも、ルミアの思いを受けて立ち直り、今ではエミリアの学費を払う手伝いのためにバイトをする傍ら、ガンツの世界で仲間を励ましながら「仲間を失わない戦い」を今なお続けている。

エミリア・ミュラー

ヒューマン 女性 18歳 ポジション：玄野 加藤

アダムの同僚でパートナー。天真爛漫な性格と時折見せるものぐささで、社内の知名度は高い。どちらかと言えば研究者向きで、ナギサ曰く「彼女の本分は戦闘ではない」のだが、伊達に世界を二度も救ってはならず、その戦闘能力には目を見張るものがある。天才的な演算能力と奇跡ともいえる記憶力を持っているが今作ではあまり関係ない。

（以後オリジナル設定）

ガーディアンズに所属していた時に学校教育をろくに受けていなかったため、現在はリトルウイングを休職して学校に通っている。

アダム同様ディ・ラガンに殺されガンツに召喚される。考えの違いからすれ違うアダムとユートを誰よりも気遣っていた。今はパートナーとしてアダムを支えながら戦っている。

ユート・ユン・ユンカース

ニューマン 男性 17歳 ポジション：加藤

モトウブの原住民族「カーシュ族」の生き残りで、文明とかけ離れた行動をとる野生児。フォトンへの感受性が極めて高く、五感も鋭い。バカがつくくらいまっすぐで分かりやすい性格で、そのため暴走することも。好物はプリン。

（以後オリジナル設定）

エミリアに恋心を抱いている。

また、時々クラッド6で買った服を着ることも。

デイ・ラガンに殺されガンツに召喚される。理不尽な戦いを否定し、敵を殺さず仲間を守ろうとするが、おこりんぼう星人ミッションでエミリアを庇い命を落とす。

ルミア・ウェーバー

ヒューマン 女性 19歳 ポジション：多恵

ガーディアンズ総合調査部に所属する女性。入隊してすぐの時はエミリア並みに明るく、直情的に動くことが多かったが、すぐに一変、生真面目な模範生となり、髪形も変えた。ただPSUのEP1で、イーサンの「エアボードで行けばいいじゃないか」という言葉を「二人乗りは禁止」とたしなめるなど、もともと真面目な人間だったと思われる。性格はとにかく真面目で頑固。現在エミリアとは親友関係にあると思われる。

（以後オリジナル設定）

アダムに思いを寄せており、彼をモデルにしたヒーローマンガを趣味で描いている。腕はかなりいいのだが、本人曰く「まだまだ駄目」とのこと。ガンツに召喚された後のアダムらの変化に気付き不安を覚える。

ハル

ヒューマン 女性 22歳 ポジション：鮎川

グラールチャンネル5の人気キャスター。多芸すぎるためバーチャルアイドルではないかという噂もあるが、ちゃんと実在している。

（以後オリジナル設定）

最近演技力を買われてドラマにも結構な頻度で出演する。実はガンツ卒業生であり、ガンツ部屋に戻りたいという潜在的欲望を持っていたため黒い玉を送られる。

キース

キャスト 男性 41歳 ポジション：鈴木

リストラされたサラリーマン。当初はただの気弱な中年男だったが、今ではいくらか戦いにも慣れ、何度かほかのメンバーの窮地を救ってもいる。

妻を事故で亡くしており、彼女を蘇らせるために100点を目指す。

グレイ・アラマンツ

デューマン 男性 19歳 ポジション：桜井

ガンツに召喚された時はニートだったが、今はフリーターで、カレー屋でバイトしているらしい。おこりんぼう星人ミッションで召喚される。

アダムとエミリア、キースの次に戦いを経験しており、ノリの軽い性格をしている。多少空気が読めないが、ガンツにとらわれ、終わりの見えない戦いに身を投じる中ではそこはむしろ長所と受け取られる。

ラルフ・ガイ

ヒューマン 男性 17歳 ポジション：西

アダムより前からガンツの世界でミッションを経験している高校生。何故かスーツの上から私服を着用。非常に冷酷な性格で、仲

間を窺にして、油断した星人を捕獲のちに殺す戦法を得意とする。しかし正攻法で戦っていたのは最初の数回だけのため、本人の戦闘力は絶望的。スーツの能力に依存しきっている面があり、田中星人のミッションでは周波数シフトを見破られた揚句スーツをおしゃかにされ、衝撃波で肩をえぐり取られて死亡。

ちなみに召喚された際の死因は餅をのどに詰まらせての窒息死。母親の後を追って自殺した西とはえらい違いである。

黒服：壺

種族不明 男性 年齢不明

高い攻撃力でガンツプレイヤーらを襲う謎の黒服集団のリーダー。ほかのメンバーより感情は少しかり豊か。アダムと凄惨な戦いを繰り広げる。

ブライト・コナース

ニューマン 男性 35歳 ポジション：重田

太陽系警察公安部の捜査官。死んだはずの人々と、黒い玉の部屋の真相を追う。

ANSWER 1 つかの間の安らぎ

昼間のファミレス。そこでゆっくり食事をする客が多いが、スタッフにとつては、そこは戦場以外の何物でもない。特に厨房などがそうだ。

「トマトありがとうございました！」

「ありがとう」

アダム・マクスウェルは、洗浄の済んだトマトを別のバイトに手渡しながら、つけっぱなしのワンセグに耳を傾けていた。

『オウトク国立博物館倒壊事件から間もなく5カ月になります。太陽系警察では、テロの可能性もあるとみており……』

そうか、もうそんなに経つのか。ぼんやりそんな事を考えながら、アダムはレタスの洗浄に戻った。傭兵である彼がここでバイトしているのには理由があった。とにかく今は少しでも金を稼ぐことに専念しよう。そう考えていた。

1日のバイトを終え、彼はエミリアの家を足で運んだ。ドアを開け居間に入ると、ルミアと、紺色のブレザーを着たエミリアが、コタツを挟んで座っていた。

「あ、うつすアダム。」

「うつす。」

アダムがルミアの隣に腰を下ろす。

「エミリア、宿題は」

「終わったよ。」

「終わってません。」

ルミアがびしりと指摘し、エミリアが嫌そうな顔をする。

「だって、面白いんだもん、ルミアのこれ。」

そう言ってエミリアが振って見せたのは、ルミアが書いた原稿だ

った。

「ねえ、このヒーローって、モデルはアダムなんでしょ？」

そう言えば、そんな事を言われたっけな。アダムがぼんやりそんな事を考える。

「……む、無理やり言わされて」

「ひゅー照れてんじゃない。」

「うるさい！」

もともと二人は親友だが、こうして見ていると姉妹のように見えないこともない。これで片方が男なら、恋人といってもまかり通るかもしれない。

「でもこの漫画面白いって。新人賞出しながら。」

「私なんかまだまだですよ、もっとレベルあげないと。」

「十分上手いよ。」

「もっとうまい人もいますし、ダメですって。」

本当にルミアは真面目だ。いや、これくらいの謙遜、作家ならあるものかもしれないが。

「……ユートにも、読ませてあげたいよね。」

エミリアが明るさを装って口を開いたが、目が笑ってなかった。

アダムは思わずぎよっとなった。

「そう言えばユートって、いつ帰って来るんですか？」

「お、もうちょっと、だと思っけど。」

「本当に、村に戻っただけなんですよね……」

「あ、ああ。」

アダムもエミリアも、少しずつルミアが疑い始めているのに気づいた。

夜、ルミアはコ・タツの天板にスケッチブックを置き、そこに遊園地の絵を描いていた。アダムが、エミリアが脱ぎ捨て得た靴下を

脱衣籠の中に放り込んで廊下から戻って来る。

「あ、これ今月の分。」

彼がルミアに渡した封筒には、バイトの給料が入っていた。

「あ、べつにいいのに。」

「いやでも、ルミアが支払い手伝う必要はねえだろ。」

エミリアは今、クラウチに進めて高校に通っている。昔、学校教育をろくに受けていなかったからである。いくら天才といっても、彼女が優れているのは計算がかかわる分野だけ。特に語学などはからきしだった。

しかし、学校というのは何かと金がかかる。そして、リトルウィングに舞い込む依頼の数はそう多くないため、彼女の家もそんなに余裕がある訳ではない。というわけで、アダムは傭兵として自分の食いぶちを稼ぐ傍ら、彼女の学費などの支払いを手伝うためにバイトしているのだ。

「でも、この家には通い続けてほしいんだ。」

「当たり前です。エミリア、私が見てないと宿題しないし。……あと、ここに来ればアダムさんとも会えるし。」

「ルミア……」

ルミアはしばらくニコニコしていたが、アダムが黙りこんだのに気付いてうるたえた。

「あ、ちょっと黙らないでください！今は体験取材です！恋の駆け引きをマンガに生かそうかと……」

アダムは思わず笑っていた。つられてルミアも笑顔になる。

風呂場のドアが開く音がする。
すると

キイイイイイイイン……

アダムの頭の中に鋭い金属音の様な物が響いた。ガンツがメンバーを呼ぶときに出すあの音である。

「じゃあ、俺もう行くわ。エミリアが、今日は泊っていいって言うたから。」

「え、アダムさん、今日はバイトもうないって」

「ゴメン急に呼ばれた!」

「アダムさん!」

慌ててドアを飛び出していったアダムをルミアは追ったが、ドアが開いた時、彼の姿は何処にもなかった。

ルーシー・メイは、地下鉄のホームで単語帳をめくっていた。今日も、図書館で試験勉強していたら遅くなってしまった。

不意に、彼女は嫌な気配を背中に感じた。殺気とも、敵意とも違う、変な感じだった。

振り返った彼女は、キャップを目深にかぶった人影が自分を見つめているのに気付いた。すると、その人間が不意に腕を突き出し、ルーシーの体を押した。そして、彼女のすぐ近くには、通過列車が迫っていた……

次に彼女が目を開いたのは、何処かのマンションの一室だった。すぐ目の前にある黒い球体が存在感を放っている。

「あなたも、選ばれたんですね。」

後ろから聞こえた声に、彼女は振り返った。そこには、ウェットスーツの様なものを着込んだ人間が何人もいた。

「最初は慣れないですから、見るだけで構いません。ほかの人もそうでしたから。」

彼女に最初に声をかけた男が、そう言った。なんだろう、見ているだけで、こちらが勇気づけられそうな気がする。

てめえ達の命をどう使おうと私の勝手なわけだす

彼女の後ろで、ガンツがいつものへたくそなイントロダクションを点滅させていた。

ANSWER 2 / 希望

「ハッ!!」

気がつくとハルは自分の車の中にいた。

もう何度めだろう、気がつくと服装が変わっていたり、場所が移動していたりする、そしてその前の数時間の記憶がないのだ。

とりあえず車を出て部屋に戻ろうとする。いったん気持ちを落ち着かせたかった。しかし彼女は自分の前に立つ、コートを着込んだ人影に気づいた。

「ひっ!」

自分でも、何でそんなに驚いているのか分からなかった。

「……すいません、驚かせて。少しよろしいでしょうか。お時間はとらせません。」

その男―ブライト・コナーズの言葉に、ハルは答えなかった。いや、答えられなかった。

「突然の休業宣言について、いろいろ憶測が飛んでいますね。病気だ結婚だ妊娠だと。海外に移住したという噂もある。ですが、私は掴んだんですよ、真相を。」

「……………マスコミの人?」

だが、コナーズはその問いかけには応じなかった。

「きっかけは些細な、しかし信じられないような出来事の積み重ねです。事故で死んだ人間がその場から忽然と姿を消し、夜が明けると何事もなかったかのように生活を送る。そして何の因果かその夜は、必ずグラールのどこかで破壊活動が行われている。」

コナーズはハルのすぐ横まで来て、前を向いたまま続けた。

「……ご存じじゃないですか?」

「い、いいえ……………」

もちろんそんなこと知らなかったが、本当にそう言い切れる自信はなかった。

「では、あの噂は？」

コナーズの顔がハルに向く。ハルもつられるように彼に向き直った。
「黒い玉と、それがあある部屋についての噂。」

その言葉を聞いた途端、ハルは思わず目を見開いた。知らないはずなのに、すさまじい既視感がハルに襲いかかってきた。

「知ってるんですね？」

ハルの表情に気付いたコナーズは畳みかけたが、ハルはその問いには答えず、彼の横を通り過ぎていった。

一見すれば、そこはただの雑居ビルの裏口だった。コナーズは扉の前まで来ると、建てつけが悪いらしくなかなかあかないドアをこじ開けた。薄暗い中に踏み込むと、たちまちもうもうたる砂埃が舞い上がる。

埃を吸ってせき込みながら、コナーズは地下に入って行った。目指す場所へはすぐ着いた。そこは広い部屋になっていて、黒いスーツにネクタイを締めた何人も人間が所狭しと立ち並んでいた。

コナーズが階段を下りると、前列で椅子に座っていたし五人の人影が立ちあがった。死んだ魚の様な眼がなんとも気持ち悪かった。その間を縫うように進んでいくと、目指す人物はいた。

背が高く、少しばかり癖のある黒髪が肩まで伸びているスーツの男だ。存在感が薄いというべきか、慎重の割に大きさを感じさせない。彼がこのリーダーだとコナーズは睨んでいた。コナーズは肩にかけて鞆から資料の入ったファイルをつかみだし、その男に渡した。男は資料をぱらぱらとめくり、腰かけていた机から離れる。

「じゃあ、四つ。四つ質問していいよ。」

「お前らの目的、こんなところに集まって、何してる？」

「黒いボールを探してる。」

リーダーは軽くこぶしを握り、コナーズの前にかざして見せた。
「黒いボール？」

「それがあれば、ゴキブリの巣にいける。」

「それは黒い玉のある部屋の事か？」

「よく知ってんな、何処で聞いた？」

「今回は俺が質問する番だ。その部屋はどこにある？」

リーダーは誤魔化すように視線をそらした。

「この空間にはないよ。」

「どういう事だ？」

「あの部屋へは、普通じゃいけない。」

コナーズは相手の言葉の意味を図りかねた。考えようと顔を下げると、彼の視界を見覚えのあるものがかすめた。

それは何枚もの顔写真だった。そしてそのほとんどは、彼が持っているものと同じ、『死んだはずの人間』の物だった。

「………… お前ら、誰だ？」

「それ五つ目の質問。」

リーダーがさかさ指摘を返す。

「何故俺と同じ事件を追う？」

「六つ目。」

「いったい、何がしたい？」

「知リたかつたら、もう一人調べてきて。」

リーダーが壁からはがして持ってきたのは、アダムの写真だった。

ルミアはその日、リトルウィングの事務所でクラウドの散らかった書類を片付けていた。そうしているのに特に理由はなかったが、いわゆる習慣と言う奴だろう。最近家は家にいるよりこの事務所やエミリアの家にいる事が多かった。

「たまには二人でどっか行ってきたらどうだ？ アダムと。」

いきなりクラウドが口を開く。

「なっ、いきなりなんですか？」

照れ隠しはしているつもりだったが、クラウチにははっきり見抜かれていたらしい。

「なんでだよ？デキてんだろ？」

「デキてません。」

ルミアがどちらかと言えば正しかった。アダムとの関係は、あの駅での一件以来、ほぼ進展がなかった。ここに来ていればアダムと会える機会も増えるだろうと考えていたが、結局すれ違いばかりだった。

「何でだ？コクったんだろ？」

内心しつこいと思いつながら、ルミアは答えた。

「ユートがかえって来るまで、アダムさんはほかの事考えられないみたいですし……あ、でも、落ち着いたら、ちゃんともう一回言うつもりですから。」

「マジか？」

クラウチがニヤツとした顔になり、ルミアは我に返った。一体自分は何を言ってるんだ。

「マジです。ハイこの話おしまい。」

「つまんねえな。」

ルミアは、自分の顔がほころんで行くのが分かった。

「『まくすうえる 94てん あと6点で終わり』

『みゅらー 91点 あと9てんでおわり』」

アダムは、ガッツに浮かんだメッセージをゆっくり読み上げた。

「いいいよですね。」

振り向くと、キースの姿があった。最初は気弱だった彼も今では戦いになれば、何度か窮地を救われたこともあった。そして、彼の穏やかな人格には、何度も励まされたものだ。

そう、いよいよだった。

しょうとく星人、ひょうほん星人、まんざい星人……種々雑多な星人を倒しここまで来る苦労は並大抵の物ではなかった。しかしそれだけ大きい見返りもあった。

「はい。」

アダムは満足げに笑いながら頷いた。

「オイオイオイ何なんだよ、コレえ！何起こってんだって！」

叫んでいたのは新入りのジャンだった。どうやらいまだに状況を飲み込めてない。

「つーかさあ、アンタら誰なんだよ？」

「誰ってもう……」

グレイが何とか説明しようとしたが、言葉に詰まっている。

「私は、サラリーマンでした。」

キースが最初に口を開いた。こういうとき、彼が真つ先に喋る。

「コバタケ文具で二十年間、皆勤で働きました。あ、まあ、リストラされましたが。」

「あたしは、介護師やってます。」

次に話したのはミレイナと言うガンツメンバーだった。

「昼はな、夜はホステス。年誤魔化してな。」

口を突っ込んだのはイアン、ミレイナと同時期に召喚された人間だ。

「ああ？」

「オバサンのくせに人気あるんだよ、信じられる？」

「こいつはヒモ、女の敵。」ミレイナは憎たらしい口調でイアンを指さした。だが、いつもこうやってのしりあっている割には二人はいつもそばにいたし、ガンツのミッションでも、アダムとエミリアの次に息が合っている。

「……俺は高校生。」

ロランと言うメンバーが口を開いた。感情をあまり表に出さない。よく言えば冷静沈着、悪く言えばシャイな奴だ。

「俺はフリーターっす。」

グレイが自己紹介をする。アダム、エミリア、キースの三人の次に戦いを経験している、ノリの軽い青年だ。

「今はカレー屋でバイトしてます。チェーン店なんですけど、結構おいしいですよ。」

「わたくしは、GRMでシステムエンジニアをやっております。一つ、ご用命の際には。」

デレクが口を開く。こんな殺伐とした戦いに放り出されても、営業口調の抜けない生真面目な男だった。

「…で、あなたは？」

ルーシーという女子高生がジャンに声をかける。

「……美容師だけど。」

「エミリアさんも、本当に普通の高校生ですか？」

ルーシーが問いかけるが、エミリアはその意味を掴めなかった。

「アダムさんにしたってそうです。その、傭兵って事を差し引いても、ものすごく強かったって言うか……」

「ああ、確かにね。ねえ、どうしてそんなに強いのか？」

エミリアはすぐさま答えた。アダムが言おうとしていたことと一言一句変わらぬ答えだった。

「生き返らせたい人がいるの。」

彼女の声を聞き、キースが一言だけ発する。

「ガンツ。」

すると、ガンツに無数の顔写真が現れる。その一番左下を、キースは指さした。そこにはユートの写真があった。

「彼は、前にここにいた人間です。二人は、彼を蘇らせたいんです。」

「アダムは、キースの言葉を聞いて口を開いた。

「でも、こいつだけじゃない。ここで死んだ人を皆生き返らせるんです。そして全員で解放されて、自由になりましょう。」

そう、アダムの目的はこれだった。どれほどの時間がかかろうと

も、戦いで死んだ人間を一人一人生き返らせ、最後は皆で自由になるのだ。

その第一歩がユートだった。そしてそれは、もうすぐ叶おうとしていた。

ANSWER 3 / 生贄、大切なもの

気がつくと、ハルはまた車の中にいた。ダッシュボードの上に乗っているボールの表面に、メッセーじが浮かんた。

じゃん 特徴：うるさい 好きなもの：ジョギング

部屋への鍵は4つ あと一つで戻れるよ

ボールはもう一人の生贄を欲していた。でも何のためなのか？彼女にはまったく理解できなかった。

それが誰なのか早く知りたかった。この苦しみから早く解き放たれたかった。しかし、それだけではない。戻れる、という言葉に安らぎを感じている自分がいた。

最後の鍵はこの方だす

ボールに浮かび上がった写真に写っていたのは、髪の毛の長い、ガーディアンズの制服を着こんだ少女の顔だった。

るみあ・うえーばー 特徴：きまぐれ 好きなもの：あだむくん

ハルは、生気を感じられない目でボールを見た。彼女に、もう物を考える力は残っていなかった。

アダムは、ルミアを空港まで送っているところだった。

ルミアが、突然口を開いた。

「この間、間に合いましたか？」

「ん？」

アダムはその意味があまり分からなかった。

「バイトです。」

「ん、ああ、間に合ったよ。」

「大変ですね……」

完全に疑われている。というか、言い訳の内容をいちいち覚えている余裕などなかったのだが。

「そうなんだよ。キースっておっちゃんがいるんだけど、その人が休むと、店まわなくなっちゃうんだよ。で、まあ、俺が呼ばれて

……」

しかし、ルミアは彼の前に回り込むと、その目をじっと見つめた。

「アダムさん……いい事、ありました？」

「え？」

「あつたんですね？」

確かに、彼の頭はユートの事で少し浮ついていた。ルミアって、

読心術使えたっけ？そんな事をちらりと考えながら、アダムは口を開いた。

「あ、うん、実はエミリアにはもう言ったんだけど、もうすぐ、ユートがかえって来る。」

「え……連絡、取ってたんですか？」

アダムはしまったと思った。ルミアには、ユートから何の音沙汰もないと言っていたからだ。

「ああ、こないだ急に連絡入って。」

「そうですか……」

ルミアが黙りこんだ。アダムは少し申し訳なくなった。

「そんなことより、ルミアにも一つ報告が、でも報告っていうか……」

……

「？」

前々から言う決心はついていたが、やはりいざ言おうとすると緊張する。アダムは腹に力をため、思い切って言ってみた。

「遊園地行かない？」

ルミアが驚いた表情を浮かべて一瞬固まった。アダムはとりあえず続けた。

「ね？たまには二人で。」

「あ、あの時の告白の事なら、ハプニングだって言ったじゃないですか。忘れてください。」

「忘れれる訳ないじゃん、絶対行こうよ。」

「ムリですって。」

そう言いながらも、彼女は嬉しそうだった。

「遊園地の絵、書いてたじゃん、実際に見た方が、マンガの勉強にも。」

「……分かりました。でも、無理やりアトラクション乗せるとか、そう言うのはナシですよ？」

ルミアがそう言い、アダムの差し出したチケットを受け取った。

「あ、私もうここまででいいんで。じゃあさようなら。」

「じゃあな。」

アダムは駆け出しながら、自分の胸が躍るのを感じた。

今はまだ無理だが、ガンツから全員を解放するその日が来れば、ルミアと新しい一歩を踏み出せるはずだ。

そう、確信できた。

ANSWER 3 / 生贄、大切なもの（後書き）

第二回人気投票を行っています。詳細は活動報告で。

ANSWER 4 / 解釈不能意味不明

宿舎へと戻ったアダムは、自分の部屋の前に、パーカーを着た少年が立っていることに気付いた。その少年はアダムに気付くと、ゆつくりとそちらを向いてフードを下ろした。

アダムの足が止まる。

いるはずのない人間が、そこにいた。

「……………！！」

その少年は、彼の顔に視線を送ると、言った。

「お帰り、アダム。」

彼の目の前に立っているその少年こそ、ユート・ユン・ユンカー
スその人だった。

「ど、どうやって生き返ったんだ？」

アダムは、自分の声が震えているのが分かった。

「ガンツから、どうやって？」

ユートは答えなかった。そう、何も。

「覚えてないのか？」

「……………何人いるんだ？」

ユートが唐突に問いかけた。

「え？あ、俺入れて、10人。最近、3人増えた。」

アダムは思い返していた。ユートを失った次の戦いでミレイナと
イアンが召喚され、そのおよそ一カ月後位にロランが加わった。そ
れからは、アダム、エミリア、キース、グレイと、その三人で戦っ
ていた。しかし、その間も新しい人間を補充しようとしなかったガ
ンツが、急に三人もメンバーを増やした。戦力が多い方が当然助か
るが、アダムはそこに何かあるのではないかと言う思いがあった。

ユートは顔を少し下ろし、口を開いた。

「ガンツを、終わらせたい。」

「え？」

その言葉に、アダムは反応した。あの地獄から逃れる方法があるというのか。そしてガンツが終われば、死んでいった人たちもみんな助かるのではないか、というかすかな思いもあった。

ユートは、動揺するアダムの目の前に、右拳をかざして見せた。「知らないか？これくらい黒いボール。」

面白いくらい話がかみ合わない。彼の問いはどれも唐突だった。「いや、さあ……」

ユートは落胆したようにアダムに近寄ると、彼の隣で、こう言った。

「また来る、何か分かったら、教えてくれ。」

そう言っただけで去っていくユートを見送りながら、アダムは自分の頭に耳鳴りが響くのを感じた。

忘れ物を取りにエミリアの家まで来ていたルミアは、ノック音に反応してドアの開いた。と、彼女の表情が一瞬にして驚きのそれに代わる。

「え……？ユート？」

ルミアの目の前に、ユートが立っていた。彼女はすぐにクラウチに声をかけた。

「クラウチさん！ユートが！」

だが、部屋の向こうからは何も聞こえなかった。

「クラウチさん？」

「……何もいわねえでいきなりいなくなりやがって、今まで何処い

ってやがった。」

「む、村に戻ってたのよね？」

「……ユートに聞いてんだよ。」

ルミアは二人を取りなそうとしたが、どうやら効果はないようだ。

「……村に戻ってた。」

「……マジでか？」

「マジで。」

ユートの声は酷く冷めていた。

「……そうか。」

ルミアは、これ以上ここに理由もない事に気付いた。

「あ、私、もう帰りますんで。良かったですね、クラウドさん。」

そう言って、ルミアはそそくさと部屋を後にした。

そのしばらく後、ウルスラがかえってきた。

「ただい……ユート！ユートじゃない！」

「どうやらアダム達の言う通りみてえだな。」

クラウドの声も落ち着いていた。

「そうだ、私たちが渡す物があるのよ。」

そう言ってウルスラは冷蔵庫の前にかがみこみ、何かを取り出した。

それは、ユートが大好きなプリンだった。横に添えられたビスケットに、『お帰りユート』と刻まれている。

「いない間に、私たちが作り方覚えたのよ。」

「……毒見しろよ、お前が一番最初だからな。」

ユートは二人の顔をかわるがわる見つめていたが、やがて穏やかな笑みを浮かべた。

その夜、空には鋭い剣の様な、下弦の月があった。それはまるでこれから起こる動乱を予言しているかのようだった。

アダムはその月を窓越しに見る格好で、ガンツに呼ばれていた。

「ガンツ、死んだ人は？」

転送が終るや否やアダムは周りを見渡し、スーツの人たちの中にユートの姿がないことを確かめてから聞いた。ガンツの表面に、戦死者達の写真が映し出される。

「どうしたの？」

エミリアが問いかける。

「ユートが、生き返ったんだ。」

「え？なんで？」

キースが思わず声を出していた。

「いや分かんないけど。……でもほら、ここには載ってる。」

アダムは写真の一つを指さした。そこに映っていたのは、まぎれもなくユートだった。生き返ったなら、写真が無くなるかと思っていたのだが。

「どうなってるんだ……」

ANSWER 5 / 変（前書き）

この話から、エルモックさんの「ファンタシースターポータブル2 外伝 エミリア・ポート・レポート」とのコラボとして、セバスティアーナが登場します。エルモックさん、コラボの許可くださって、有難うございます。

ANSWER 5 / 変

ハルの目の前で先ほどからボールに浮かんでいた、ルミア・ウェーバーのデータが消えずに浮かび上がっていた。ハルがそれを見ていると、急にそのメッセージが地図に変わった。何かを探すかのようにはめぐるしく表示する区域を変えると、やがて赤い光点を中心にうつして止まった。

ハルがボールを拾い上げ、部屋を後にする。その表情は、もはや彼女の物と分らないほどだった。

突然、ガンツから青白いレーザーが伸びる。アダムは部屋を見渡したが、メンバーは全員でそろっていた。すると新入りか？

次第に姿を現していたその人間は、メイド服に身を包んだ少女だった。と言つても、体系的にはエミリアとは雲泥の差であったが、もちろんエミリアは泥の方である。

「……………え？」

やはり状況を飲み込めていない。困惑した表情を浮かべて周りを見渡す彼女の眼が、不意にエミリアと合った。

「……………ティーナ？」

「え？…エミリア？」

「え？お前、この人と知り合い？」

アダムがエミリアに問いかけ、エミリアが驚きを隠せない表情でそれに答える。

「いや知ってるも何も、前に仕事からみで」

そう言えば、そんなこと言ってたっけか？そんな考えがぼんやりと頭に浮かぶ。

「じゃあエミリア、ここについての説明、今回はお前がやって。エミリアが、ティーナと呼ばれた少女に向き直る。」

「エミリア、これは一体何なんですの？と言うかそのカッコは？」

ティーナが問いかけるが、エミリアはそれに応じずに話し始めた。
「いい？分からなかったら何回でも言うし、質問とかは後で受けるから、今はあたしの話を聞いて。」

「……」

いつになく真剣なエミリアの表情に、ティーナは喉まで出かかってきた言葉を飲み込んだ。

「あたしたちは、みんな一回死んでる。ここに集められた目的は……」

「……」

とそこで、計ったようなタイミングでラジオ体操の歌が流れる。

「……話すより見た方が早いかな。」

ガンツに、いつものイライラするメッセージが浮かぶ。

「『てめえ達の命は無くなりました』」

アダムが文面を読み上げる。

「『帰りましたらこの方をやつつけに言ってください』」

ガンツに浮かび上がったターゲットは、黒い背広に身を包んだ、ホスト風の男だった。

「『黒服星人 特徴：一見ふつう 好きなもの：黒いボール』」

そこまで読んだところで、アダムはガンツのメッセージを睨む人影に気づいた。ジャンだった。彼はなぜか、黒いボール、という文字から目を離せなかった。

ガンツの武器ラックが音を立てて開く。

エミリアはティーナの腕にケースを押しつけると、ガンツにかかっていた武器を取り出し、ガンツの横にある引き戸を引き開けて中の武器を引っ張り出すと、ティーナに機能を説明し始めた。

「……この銃は捕獲用、見た目強そうだけど、殺傷能力はないから気をつけて。このソードの使い方だけ……」

アダムも準備を始めた。自分で作ったベルトに伸縮する剣、ガン

ツソードを2本取り付け、両足のマウントラッチに黒い大振りのハンドガン、Xガンを、左腕に多機能付き端末、コントローラーを取り付ける。最後に長銃身のXショットガンを取り出し、準備が完了した。

「行こう」

アダムは横目で、ティーナがフレーム——キャスト用スーツ——を身につけたのを確認する。

ガンツに『行ってください 00:20:00』と表示が出て、アダムらの体が削られるようにして消えていく。

Gコロニーのリニアライン駅、そこに足早に向かっていく集団があった。黒い服を身にまとい——そのうちの、V字アンテナのキャストと若い少女は白だったが——、皆が死んだ魚の様な眼をしている。

「ハルが移動を開始。」

ロン毛のリーダーが短く言ったのを、コナーズは遠くで確かに聞いた。

転送が終わった時、アダム達は暗闇の中にいた。

「何処だここ？」

そう誰かが言うと同時に、明かりがつく。天井から吊皮が下がり、細長い座席の間にドアが設けられたその構造はまさしく……

「電車？」

そう、ここはまさに電車の中だった。構造から察するに、Gコロニ

「のりニアラインか。」

「なんか変だな。」

「？何がですか？」

ティーナが問いかける。ミッションを経験していない彼女には分からなかったが、今までこんなところで戦ったことはなかった。

と、急に床がぐらりと動き出す。どうやら発車したようだ。

「皆、油断するなよ。」

手にした武器を握りしめる彼らの前で、電車のドアがガアッとあいた。

武器装備紹介（前書き）

本作に出てくる武器装備を紹介します。オリジナル武器のアイデアとかあれば教えてください。可能な限り実現させます。

武器装備紹介

ガンツスーツ

ガンツが支給する、名前入りのアタツシユケースに入った特殊防護服。本人にジャストフィットするサイズのため、着用時は全裸にならないと着ることができない。また、他人のスーツではいくら体型が似ていても力は全く発揮できない。

薄い素材でできているように見えるが、二重の繊維で構成されている。その間の隙間は特殊な液体で満たされており、筋力をアシストする場合はその液体が人工筋肉として作用し、また防御力も着るだけで飛躍的にアップする。筋力アシストは感情の起伏によってその効力が変わって来る。

耐久値を超えたダメージを受けた場合は機能停止して全身のリング状のメーターから液体が漏れ、またメーターを一つでも割られると耐久値がいくらあろうと機能停止する。

ガンツフレーム

キャスト用ガンツスーツ。見た目はスーツより耐久力がありそうだが、性能は多種族用と大差ない。やはりメーターを割られると機能停止する。

Xガン

最初に支給される短銃。片手で扱えるため接近戦に強く、初心者でも簡単に扱える。発射時には銃身に取り付けられたラジエーターが放熱のためにXの字を描くように展開するためこの名がついた。着弾すると対象を内側から破裂させるように破壊する。

高圧エネルギーの圧縮に時間がかかるため、トリガーを引いてから着弾までタイムラグが存在するが威力は十分であり、コンクリート掘くらいなら一撃で粉碎できる。

2段階になった引き金の1段階目をいったん引いてから離し、2段階目まで一気に引くことで作動するロックオン機能も付いているが性能は悪く、あまり期待はできない。

Xショットガン

長距離射撃用に改良されたXガンの改良型。ショットガンの名に似合わぬ命中精度と1キロを超える射程距離を誇り、破壊力もハンドガンタイプに比べて高い。リロードを行う事によってより高威力で絞り込んだ正確な射撃が可能。また、引き金の1段階目で連続口ツクオンし、2段階目を引くことで複数の標的を同時攻撃することも可能。『ショットガン』の名の由来はこの機能だと思われる。長柄のため取り回しは悪いが、戦いに慣れてくると使用頻度が高くなってくる。原作では玄野が両手に2丁持って使用していたことから重量は意外と軽いようだ。

Yガン

火力で星人を倒す他の銃とは異なり、捕獲を目的とした銃。三叉に枝分かれした銃口からワイヤーを射出し、星人に絡みつくことで生け捕りにし、更にもう一度引き金を引くことで「上」に転送する。見た目はXガンより威力がありそうだが殺傷能力はなく、使う相手を選ぶ武器。ただ他の銃と違いタイムラグがない点は優秀。Xガンより性能のいいロックオン機能を備え、ロックオンしてから発射すれば命中するまで対象を追いかけまわす。

Zガン

原作では100点を使って武装強化することで手に入った、双銃身の大型砲。発射前にエリア指定を行い、続いて二つある引き金を同時に引くことによってそのエリアに圧力をかけてそこにいる敵を圧殺する。Xガン系を遥かに凌駕する威力を持つが強力すぎるため、誤射したときの危険性はかなり高く、また大型なためかなり取り回しが悪い。

ガンツソード

ガンツが支給する刀。世界でもっともよく切れる刃物と言われる日本刀と刀身の形状が似ており、材質の堅牢さと相まって鋼鉄をもやすやすと両断する脅威の切れ味を誇る。グリップに着いたスイッチを操作することで刀身を伸縮させ、中距離攻撃に使用することも可能。ガンタイプと違い、使用者に技量を要求する上級者向け武器である。

ガンツスピア

槍状にすることによって貫通力をアップした、ガンツソードの派生型武器。グリップのスイッチを操作することで、刃の伸縮のほかスピアモードとナギナタモードに切り替えが可能。ユートが好んで使用した。

コントローラー

スーツの腕にマウント可能な多機能付き端末。星人や装備者の現在位置を示すほか、周波数シフト機能によってスーツにステルス機能を与えることも可能。フレキシブルアームによって可動させることができる。

ANSWER 6 / 無情なる狂者ども（前書き）

第二回PSG人気投票開催中。人間枠と星人枠に分けて募集しております。詳細は活動報告で。

ANSWER 6 / 無情なる狂者ども

「うわっ、キモっ」

乗客の1人がそんな声を上げたが、黒服のリーダーは気にしなかった。6人で後部車両に足早に歩いて行く。

と、リーダーが突然足をとめた。

「先頭車両に、ゴキブリがいる。」

リーダーを除く四人がくるりと反転し、先頭車両に向けて歩きだしていった。

一方、アダムらが乗っている先頭車両。

彼らは明らかに乗客に気付かれていた。失笑しながら指をさすものもいれば、ケータイで写メを取るものもいる。

「何で見えてんの？」

「今までこんなことなかったじゃん、ねえ。」

今までのミッションはほとんど必ず無人の所で行われたし、わずかな例外の時も、プレーヤーや成人の姿は一般人には見えてなかった。しかし、今はたくさんの人がひしめく電車の中。こんなところで戦いが始まれば、どうなるかはだれでも想像がついた。

「皆さん、我々は怪しい集団じゃありません、危害も加えません。」

キースが何とかしようとして口を開いたが、そう言っている彼はXガンを持ち上げて身構えていた。

「……あ。」

「え、なんか、イベント？」

キースが慌てて銃を下ろすが、かえってきたのは失笑だけだった。

その頃、ルミアは同じ電車に乗っていた。アダムのバイト先を訪れるためだった。勝手に言っ、怒られたらどうしよう、などと考えながら。

彼女の横の席では、幼い少女が母親と話していた。遊園地の帰りらしい。

「今日遊園地、一杯人いたね。あ、直してあげる。こっち向いて。」
母親のその言葉を聞き、少女はちょうどルミアと向かい合う格好となった。

ルミアは少しその少女を見つめていたが、やがて笑みがこぼれた。つられて少女も笑顔になる。

その彼女を、すぐ近くから見る目があった。

ハルだった。吊皮を握って立っていた彼女の眼は氷の様に冷やかだった。

その時は来た。

ガアツと音を立てて連結部の扉が開き、黒服の人影が5人入ってきた。

アダムらはその集団に、何やらただならぬものを感じた。

黒服はプレイヤーたちの姿を認めた。と、その中の一人、V字アンテナにライトグリーンの目をした黒いキャストが腕を持ち上げた。と、そこから黒い靄の様な物がわき出る。それは次第に固まってゆき、やがて漆黒に輝くアサルトライフルの姿となる。他の黒服が、同じようにしてライフルを出現させる。

「!!!!」

黒服たちは拳銃でも扱うようにライフルを片手で持ち上げると、無造作に引き金を引いた。ダラダララツと重たい銃声が鳴り響く。

音からして、使われているのは実弾か？前方にばらまかれた銃弾が凶暴な鳥の様に空気を切り裂き、乗客たちの命を無差別に食い荒らしていく。

「な、何だ！？」

「きやああああ！！！」

パニックになった乗客が、次から次へと倒れていく。とつさにシートの上に身を隠したプレイヤーたちも、動けないでいた。

「アダムさあああん！」

グレイが頭を抱えてうずくまる。

反撃しようと双銃身のZガンを構えるティーナを、エミリアは銃身を押さえて鋭く制する。

「撃たないで！人を巻き込む！」

しかし、黒服はそんなこと構わず、銃弾をバラ撒き続けた。

「叫び声してね？」

「パンパン言ってるけど。」

近くの数人の声に、ルミアとハルは先頭車両の方向を向いていた。と、突然近くで鋭い銃声が響く。同時に、さっき聞こえた悲鳴が近づいてきた。

彼女達が身の危険を悟ったその時、連結部の扉が開き、前方から乗客からなだれ込んできた。

客のほとんどは床に身を投げ出して動かなくなっていた。弾切れを起こしたのか、黒服の銃声が止んだ。

アダムはその隙をついて飛び出すと、ショットガンを納め、ベルトのホルスターから2本のソードを抜いた。スイッチが入り、柄から黒い湾曲した刃が飛び出す。

先頭のキャストはそれを見ると、ライフルをあっさり投げ捨て、空っぽの両手を前に突き出す。と、またもやその中から靄が湧き出、特徴的な双剣、干将・莫耶が現れる。

「！！！！」

アダムは少しばかり驚いたが、すぐに平静を直すとそのキャストに勇躍斬りかかって行った。

ANSWER 6 / 無情なる狂者ども（後書き）

ひょっとしたらお気づきの方もいるかも知れませんが、今回アダムと対峙する黒服のキヤストは、「ファンタシースター それゆけ機械人形」とのコラボで参戦した、NT-Xです。雑炊さん、コラボ許可くださり、ありがとうございます。

ANSWER 7 / 激戦のメトロ

「くそつ、何が起きている！」

電車の中、コナーズは押し寄せる人波を手すりにつかまってやり過ぎしていた。黒服を尾行するだけのつもりだったが、こんなことになるとは想定外だった。

乗客は完全に混乱していた。最悪なのは、情報が全く入らないことだ。状況の不透明さのせいで、パニックがさらに拡大していく。
「くそつ！」

キャストはアダムの一撃を受け止め、逆にはじいていた。しかしアダムは鍛え抜かれた動きで素早く体勢を立て直し、双剣を握りしめて攻撃に転じた。

二の立ち、三の太刀が繰り出され、瞬く間にキャストが追い詰められていく。そしてアダムの放った一撃は、キャストの剣を両方とも弾き飛ばしていた。

「でやあっ！」

アダムは右手に握ったソードをそのままキャストの胸に突き入れた。常識からいえば致命傷以外の何物でもなかったが、キャストはダメージを受けたようには見えなかった。

と、アダムは、キャストの掌に二丁の拳銃——確か名前はファイアースX303-FKだったか？——が出現したのに気づいた。素早くソードを納め、身をひるがえしてかわす。同時に、今までアダムがいた場所を高速連射された弾丸が駆け抜けていった。

一方ティーナとエミリアは、別の黒服と戦っていた。相手は両手

用の刀を片手で振り回す剛腕の持ち主だった。

ティーナの剣術はかなりの物だったが、やはりミツション初心者である事は見てすぐ分かる。スーツの力に振り回され、思うように力を出し切れていない。ソードを持たないエミリアは攻撃をよけるのに精一杯だった。0.5秒も隙があれば彼女がXガンを抜いて引き金を引くには十分だったが、その隙さえなかった。

「ちいつ、思ったより手ごわいですわね！」

「これがガンツよ！気を抜かないで！」

と、ティーナの体が急に後ろに吹っ飛んだ。黒服が彼女の一瞬のすきを狙って、胸に蹴りを入れたのだ。しかし、その一瞬が命取りだった。

ジャキイインと作動音が響き、一瞬の間の後、黒服の両腕が吹き飛んだ。エミリアがXガンを二丁とも抜き、黒服目掛けて撃つていたのである。

「…なかなかやりますわね、幼児体型女！」

ティーナが武器を失った黒服に切りつけ、その体をけり飛ばす。

とその時、後ろでロランとグレイをノックアウトしたもう一人が襲いかかってきた。

「でえやああああ！！！」

背後から襲いかかったのはヒモのイアンだった。しかし彼の斬撃は苦もなくかわされ、逆に襟首をつかんで投げ飛ばされる。

「イアン！」

ミレイナが叫んで黒服に切りかかった。しかし、黒服は落ち着き払った表情で刀を一閃した。見た目はただの二ホン・トウにしか見えなかったが、ステラカーボンでできた手すりがあっけなく両断され、ガラアンと音をたてて床に落ちた。ミレイナは何とか尻もちをつくようにしてかわしたが、ソードを握った手は明らかに震えていた。

その様子を見たキースは思わず逃げ出していた。連結部の扉をくぐりぬけ、後ろに逃げ込む。しかし、そのではさらにもう一人が、両手に握ったサブマシンガンで乗客を惨殺していた。

「う……」

逃げ場はない。とその時、彼の横をかすめて黒服に飛びかかった人影があった。

例の新入り三人組、デレク、ジャン、ルーシーだ。

黒服はすぐさま彼らに発砲した。しかし三人はそれを恐れるそぶりも見せない。黒服の銃はたちまちルーシーが握った鞭——xウィップ——に絡め取られ、奪われた。新しい武器が出現するガン三人は構わず突進していった。

「……凄い……」

三人の圧倒的なチームワークに、キースはただ呆然と見ていることしかできなかった。

ANSWER7/激戦のメトロ(後書き)

武器追加説明

Xウィップ

Over the Rainbowさんの投稿

ガンツソード同様に普段はグリップだけになった武器。

スイッチを入れることで無限にのびる光の鞭が伸展し、そのまま攻撃に使うほか、相手を絡め取って動きを封じたり、命綱代わりにしたりと用途は広い。グリップに取り付けられたトリガーを引くことでXガンと同じエネルギーを絡め取った相手に流し込み、爆破することも可能。その際に鐔状に配置されたラジエーターがXガンと同じように展開することからXの名を冠する。動きにクセがあるため、上級者向け。

ANSWER 8 / 遭遇

コナーズは、後方の車両からも乗客が逃げ込んできているのに気づいた。

急いでそこに向かった彼の眼に映ったのは、床に身を投げ出して動かなくなっている人々と、刀を握った異様な大きさの男だった。ゆっくりと振り返った男に、コナーズは見覚えがあった。確か、こいつも黒服のアジトにいたはずだ。どうやら、別動隊がいたらしい。男が、のっそりとコナーズに向けて動き始める。コナーズはすぐさまナトランサーに手を伸ばし、テノラ製の赤い拳銃を取り出して構えた。

「止まれ！」

しかし、男は足を止めようとしなない。

コナーズの銃が一発の弾を吐きだし、それが膝のあたりに命中する。しかし、黒服は目を漆黒にさせただけで、やはり彼に向かって歩みよっている。

二発目、三発目。やはり黒服の動きは止まらなかった。

アダムはキャストと激しく切り結んでいた。パワーやスピードだけならこれ以上の星人はいくらでも知っている。だが、彼らの技は今までアダムが見てきた中でもトップクラスだった。おまけに切っても切っても動きが鈍らず、武器を叩き落としても新しい物を次々に出現させてきた。

「でえやあつ！」

アダムの双刃がキャストの腕を叩き落とすべく振り下ろされるが、その一撃は難なくかわされ、逆に刃を叩きつけられる。とつさにソードを突き出してガードするものの、凄まじいパワーまでは打ち消し切れずに吹っ飛ばされ、連結部の窓を突き破って後ろの車両に転

がり込んだ。と、そこでアダムは、xウィップを構えて膝をつくるシーと背中合わせの恰好になった。

「思い出しました。あたし、前にも同じことやってた。」

「え？」

ルーシーの唐突な言葉に、思わず声が出る。

「前にもあの部屋にいた。デレクさんも、ジャンさんも。」

しかし、私語を交わしている余裕はなかった。キャストが扉を蹴破ってやってきたのだ。アダムは二振りのソードを構え、キャストに向き直った。

エミリアと言えば、仲間の戦闘を見ながら、xガンの狙いをじっと定めていた。隙があれば援護射撃を行いたかったが、こう動きまわっては仲間にとってしまう可能性もあった。

と、さつきティーナに斬られたはずの黒服が、身を起こした。爆破されたはずの腕が、二本とも付いている。

「きゃあ！」

横殴りに叩きつけられた刃を受け止めたティーナの体が左に吹っ飛ぶ。

「ティーナ！」

エミリアが素早くxガンを構えたが、黒服の動きは素早かった。銃を蹴り飛ばし、大上段にソードを振りかぶる。

が、その刃がエミリアに届くより早く、発行するレーザーアンカーが飛来し、黒服の体を絡め取った。見ると、黒服の背後で、ロランがYガンを構えてたっていた。

「…ぼさつとすんな。死にてえのか。」

「…ありがと。」

「ふっ、まあこいつの点数は譲りますわ。」

ロランがもう一度引き金を引くと、天井を突き抜けて空から延びてきたレーザーに黒服の体が削り取られ、転送されていった。

乗客たちは完全にパニック状態になり、他人を思いやる余裕などなしに真ん中の車両に逃げ込んでゆく。

その人ごみに紛れる様にして、リーダーはゆっくり『目標』に近付いて行った。

彼がハルの姿を確認するや否や、リーダーの手の中に黒い靄が湧き出、それは水平二連ショットガンの形になって凝固した。

バレルを引いてリーダーが一発放つと、前方にいた乗客が何人か吹っ飛ぶようにして倒れていった。

ハルはその光景を呆然と見ていたが、その銃弾が自分に向けられているものと分かったとたん、背を向けて走り出した。

凄まじい力でたたきつけられた刃を、両手に握ったソードでアダムは何とか受け止めた。しかし彼の体はそのままの姿勢で窓に叩きつけられた。はめ殺しになったトランスパリスチール——特殊透明鋼が砕け散り、アダムの体が半分車外にはみ出す。

キヤストは剣を捨てると、縦にずれた拳の中にガトリングガンを出現させ、アダムに向けようとしながら弾丸を見舞った。

アダムは押しつけたソードにしのぎで何とかガトリングガンをそらしていたが、少しでも力が抜ければ、防御が手薄な顔面にまともに銃弾を喰らってジ・エンドだ。

「ぐうう……」

アダムは右手で何とか力を込めながら左手を離し、銃がマウントされた太腿のラックに手を伸ばした。手がXガンのグリップに届き、強く握ったと同時にマウントが外れる。アダムはそれを持ち上げてキヤストの頭に押し付け、引き金を引いた。

「喰らえ！」

ジャキイーン。銃声が鳴り響き、青白いマズルフラッシュが灯る

と同時に銃身が展開する。

一瞬の間の後、キャストの頭が爆発する。ショートの火花を散らしてその体から力が抜けていき、窓から身を乗り出すような姿勢になった直後、風圧で後方に吹っ飛んで行った。

「うっわ！」

しかし、アダムの体も、キャストに押される格好で風に持っていかれていた。

と、丁度差しかかったホームの上を飛ぶアダムの目には、車両の中で人波にもまれて翻弄される、ルミアの姿が映っていた。

アダムは四肢についてブレーキをかけると、すぐさま脚力を全開にして駆け出し始めた。

運転手が流れ弾にやられ、減速の手段を失った電車はすでかなりの速度になっていたが、スーツの脚力をもつてすれば追いつけない事はなかった。すぐさま横つとびに飛び込み、窓を突き破って中に転がり込む。

トランスパリスチールの破片と踏みしめてたちあがったアダムの目には、規格外の大きさの男の姿が映っていた。男がゆっくりと振り返る。

黒服。死んだ魚の様な眼。手に握られた刀。

コントローラーを展開して確認する。間違いない。こいつも星人だ。

アダムはすさまじい速度で黒服の脇をすり抜け、ついでに左のソードを振り抜いてその胸を払った。

ほとんど胴体は両断されていただろう。その黒服が、ドスンと音を立てて膝をつくのが見えた。

アダムは正面を向いた。と、彼は、そこに拳銃を構えた人影がいるのに気づいた。

その男が銃を構えなおしたのを見て、アダムはそこに駆けだし、両手で握ったソードを振り上げた。

銃声が鳴り響く。しかし、その射線はアダムには向けられていな

かった。

後ろを振り向くと、さつき切り倒したはずの黒服が刀を振り上げてたっていた。頭に風穴を穿たれたその黒服が刀をゆっくり取り落とし、今度こそ絶命して倒れ伏した。

どうやらこの男はアダムを助けてくれたらしい。アダムはソードを下ろして一礼すると、ショットガンを引き抜いて駆け出して行った。

コナーズは、黒いスーツの男が頭を下げて駆け出して行ったのを見届けた。さつきからしびれたように動かなくなっていた彼の体が、ようやく息を吹き返してくれた。

「……アダム……マクスウェル……」

あれは間違いなくアダムだった。だが、彼が身に着けていた、あの服は何だ？あの武器は？

彼の脳裏には、様々な思惑がひっきりなしに飛び交っていた。

星人紹介（前書き）

こんなタイミングでか？とか言わないでください。

『ピーー』 星人の正体を出したらそのデータを追加します。

人気投票はまだまだやっています。人間と星人の中から好きなキャラを一人ずつ送ってください。詳細は活動報告で。オリジナル武器の募集もやっています。

星人紹介

ねぎ星人

スーパールのレジ袋を持っているなど、人間社会に紛れて暮らしていると考えられる星人。普段は温厚な性格だが、危害を加えられるとねぎ臭い汁を出して牽制を行い、鋭い爪で攻撃してくる。そのほか、ジュニアねぎ星人は逃げ足の速さ、親ねぎ星人は怪力が特徴。フォトンバレットをはじき返す堅牢な体の持ち主。特に弱点はないが、命の次に大切なねぎを差し出したら降伏のサインである。

ジュニアねぎ星人はガセ情報で色めき立ったメンバー数人に、親ねぎ星人はラルフにそれぞれXガンで射殺される。

田中星人

ロボットの様な姿をした星人。本来は鳥の様な姿だが、グラールの大気では呼吸もままならないためロボット型の外殻を纏う。親しみやすい外観をしているが、機嫌を損ねると表情や態度が一変。パUNCHの連撃で相手を弱らせた後、口から発射する圧搾空気の波動で止めを刺す。ラルフの周波数シフトを見破ったことから、カメラアイにはサーモグラフィを採用していると見られる。他に、足のブースターでの飛行も可能。

アダムのガンツソードで頭部を貫かれ自爆する。

ちなみにモデルは、『おかあさんといっしょ』の初代歌のお兄さんである、歌手の田中星児。アニメ版では、田中星児への配慮から、名前が鈴木星人になっていた。

おこりんぼう星人

擬態能力を持った星人で、アダム達が遭遇したものは博物館に陳

列された仏像に擬態していた。人間を握りつぶせるほどの大きさから人間と同じくらいまで様々なサイズのものがある。名前の通り怒らせるとヤバイ。

二・オウ像に擬態していたものと、セン・ジユ・カンノンに擬態したものがおり、どれも凄まじいパワーを持ち接近戦を得意とする。二・オウ像はアダムのXショットガンで頭を砕かれ、セン・ジユ・カンノンはユートを殺され怒り狂ったエミリアに粉々に粉碎される。ちなみに原作の仁王像は二人組で、片方が「あばれんぼう星人」、もう片方がおこりんぼう星人だった。

黒服星人

黒服に身を包んだ、人間そっくりの星人。両手剣を片手で振り回す怪力男、内装火器を満載したキャストなどさまざまなスタイルで戦うものがある。掌に自在に武器を出現させることができ、特に銃器の類は、アサルトライフル、サブマシンガン、拳銃、ショットガンなどさまざまな物を使う。また接近戦では世界で最も切れ味の鋭い刃物である日本刀を使い、卓抜した技で敵を圧倒する。

ガンツがつけた名前こそ違うが、どうやらおこりんぼう星人と同種族であると思われる。

原作には黒服星人は出てこないが、ヴァンパイアウイルスなるものに浸食されて同じような能力を持った黒服集団『ヴァンパイア』が登場。その中には玄野の弟、玄野アキラもいた。

ANSWER 9 / かりそめの終わり

人波にもまれながら、ルミアはさっきの少女を見つけた。倒れて動かない母親の体無く事も忘れてゆすっているが、頭から血を流して倒れる母親がどうなっているかはルミアにはすぐ分かった。と、逃げまどう人の一人が、わざとではないであろうが少女を蹴倒した。ルミアが小さな悲鳴をあげて倒れるその少女のもとに懸命に近づき、その体を抱きあげた所で、不意に銃声が轟く。

彼女の向こうにいた乗客の一人が、痙攣したような動きを見せながら倒れて動かなくなる。そして、その弾を発射した黒服のリーダーが、ルミアに今頃気づいたかのように彼女に握った拳銃を向ける。ルミアはほぼ何も考えずに少女を抱き寄せ、体で覆うようにして庇った。

と、突然物凄い破裂音が轟いた。驚いたルミアが見たのは、右腕を銃ごと吹き飛ばされ、ゆっくりと倒れて行くリーダーだった。連結部に目をやったルミアの目には、黒光りする長柄の銃を構えた黒ずくめの青年の姿が映っていた。

「……アダム……さん？」

アダムは構えていたXショットガンを下ろし、ルミアを連結部の扉に押しやった。

「逃げて。」

彼の視線の先では、リーダーがゆっくり立ち上がる姿があった。ダメージを受けた様子がまるで無い。やはり、黒服たちは完全に命を奪わない限り止まらないらしい。

「待って。」

アダムは連結部の扉を閉めようとした時、後ろからルミアの悲痛な声がした。

「……ゴメン。」

痛々しいその声に、ルミアは扉を抑えていた手を離していた。

アダムは扉を閉めると、リーダーの方に向き直った。と、吹っ飛ばされた傷口から黒い靄が湧き出た。それは見る間に形を持っていき、やがて刀を持った腕の形に凝固する。リーダーは再生された腕を曲げ伸ばしし、ネクタイを揺るめてシャツの第1ボタンをはずすと、挑発するようにやりと笑った。

「だあああああつ！」

アダムはXショットガンをラックに収めるとベルトからソードを抜き、リーダーに向かって駆け出して行った。

リーダーが車両の扉の窓枠を持ち、バキンと音を立てて外すと、重さを感じさせない動きで投げつける。アダムは上体をマトリックスばりに反らして何とかかわしたが、代わりに連結部の扉に激突し、トランスパリスチールに無数のひびが入った。

そちらにいるルミアが一瞬気になって後ろを向いたアダムに、刀を振りかざしたリーダーが襲いかかった。何とか左のソードをかざして受け止めようとしたが、一撃が重過ぎて反らすのが精一杯だった。すぐに双刀を振りかざし、スーツのパワーで凄まじい剣撃を繰り出す。そして相手の刀を叩き落とそうとソードを振りかぶったが、リーダーがから空きになった胴に蹴りを叩き込んだ。

「ウツ！」

アダムの前で、リーダーが掌に拳銃を出現させた。打ちこまれる弾丸をかわしてリーダーと反対方向に逃げるアダムの視界に、サッカー・ボールが一つ転がっているのが見えた。アダムは突然リーダーの方を向くと、助走をつけてボールを蹴り飛ばした。ボールは反れて行った様に見えたが、手すりにぶつかって軌道を変えるとリーダーの横面を直撃した。

ひるんだリーダーに、片方のソードを両手で構えてアダムが突っ込んでいった。しかし、リーダーは突き出した銃口で剣先を止めた。躊躇うことなく、リーダーが引き金を引く。銃は爆発し、リーダーがその勢いで倒れたが、アダムも後ろに吹っ飛び、ソードが手を離れて飛んで行く。

をスライドさせると引き金を引いた。

ジャキインと銃声が鳴り響くと、銃を投げ捨て、リーダーの体を持ち上げて後方に思い切り投げ飛ばした。

投げられたリーダーが、遠ざかっていく後方車両をバックに飛んでいく。なおもリーダーから発砲の光が見えたが、投げ飛ばされて風にもまれる状態では当たる訳もなかった。と、不意に光が消え、バアンと破裂音が響いた。黒い飛沫が飛び散ったのを見届けたアダムは、Xショットガンを拾い上げて先頭車両に駆けて行った。

その先頭車両では、今も黒服と新入り3人の激しい戦闘が続いていた。

Xウィップがパーカーを着た黒服の腕に巻き付いたと同時に、ルーシーがグリップに着いたトリガーを引いた。ギョオオーンと作動音が響いてラジエーターが展開したと思うと、エネルギーを流し込まれた黒服の腕が爆発し、黒服はそのままよろよろとキースの方に歩み寄ってきた。

「わああ！」

こつちに来るなとばかりに振り回したソードが、たまたま黒服の首をはね飛ばした。切断面から血しぶきをまき散らして倒れる黒服から恐怖のあまり背を向けたキースは、反対側から飛び込んできた別の黒服の胸元にソードを突き刺していた。

「あああ……」

急所を突かれたのか、黒服は口から黒い血を吐き、そのまま絶命した。

キースはソードを抜くと、自分が止めを刺すこととなった黒服たちを見下ろした。

残った白いブラウスの少女は手ごわかった。それなりに経験を積んでいるはずのイアンとミレイナをたった一人で圧倒している。

胸を払われたイアンが、苦痛に顔を歪めて倒れこむ。

「よくもおお!!」

ミレイナが逆上して切りかかったが、少女は逆にネジ伏せると、首筋に刀をあてた。

「止める!」

イアンが立ちあがったが、ミレイナの首に当てた刀を引きついでの振り返った少女に胸を払われ、血を広げて倒れるミレイナの上に転がった。

「…ちよつと、重い。どいて。」

「…庇ってんだよ。」

イアンが強がって見せる。

「…アイツ、手ごわいっすよ。」

「うん。」

キースとグレイがソードを構える。と、その横を三つの影が駆け抜けた。

新入りの三人だった。

とたん、さっきまでの攻勢がウソだったように少女が押されていた。彼女がどれだけ強くても、流石に手練れの戦士が三人相手では分が悪かった。

ルーシーと切りあっている隙について、デレクとジャンが少女を押さえ込んだ。そして、ナイフ大に刃を縮めたソードをルーシーが投げつけた。人間なら心臓がある位置を貫かれた少女は床に膝をつき、ガンツ戦士^{ブレイヤ}三人をねめつけた。

アダムがそこに着いたのはちょうどその時だった。

「…復讐だ…先に仕掛けたのは…お前たちだ…」

地面に這いつくばったその少女が発する言葉に、アダムは凍りついた。同じ言葉を、セン・ジュ・カンノンも言っていた。

「お前たちは私の仲間をたくさん殺した…絶対に…許さ…ない…」
それきり、少女は動かなくなった。

転送が始まるのにそう時間はかからなかった。

アダムは最後に転送されてきた。ガンツのタイマーが「99:99:99」になっていることに、気付いた者はいなかった

「全員、無事ですか？」

アダムの言葉に、エミリア、キース、グレイ、イアン、ロラン、デレク、ルーシー、ジャン、ティーナが頷いて答えた。

「オバサンがいねえ。」

イアンが突然言った。確かに、ミレイナの姿が無い。
ジリリリリリリリリ……
ガンツが無慈悲にベルを鳴らす。

それぢわ　ちいてんを　はじめる

99:99:99

「おい……ちょっと待てよ……おい……」

イアンの採点が映し出される。

「……『じゃくそん　0てん　TOTAL88てん　おばさんまもり
すぎ』」

「……おい……オバサンいねえって……オバサンいねえって……オバサン
いねえって……オバサンいねえって……オバサンいねえって……オバ……う
わあああああああ……！！！！！！！！！！」

イアンが絶叫しながら泣き崩れる姿を、ほかのメンバーはただ見
ていることしかできなかった。

キャラ紹介 その2（前書き）

ひっさびさの更新がキャラ紹介ですんません！

キャラ紹介 その2

ロラン・ロルムス

16歳 ヒューマン

クラッド学園に通う高校1年生。エミリアより年下だが彼女が入学してからまだあまりたっていないため学年は同じである。高速道路で玉突き事故に巻き込まれガンツに召喚される。感情を表に出さないクールな奴、という印象が強いが、本当はコミュニケーションが苦手なだけ。モデルはGANTZの北条正信だがホモではない。最初の方はエミリアとよく組んでいたが、最近では 그레이 と共に戦う事が多い。

セバステイーナ

年齢不詳 キャスト

『ファンタシースターポータブル2外伝 エミリア・ポート・レポート』とのコラボで登場。インヘルト社で働くキャストメイド達を束ねるメイド長。シズルに対して並々ならぬ好意を寄せる。シズルの留守中に彼の部屋を掃除しようとしたところ、侵入者対策にシズルが仕掛けたガントラップに誤って引つかかってバラバラのスクラップ状態になり、黒服星人ミッションで戦力が必要としていたガンツに卒業生でないにもかかわらず召喚される。エミリアとコンビを組み、何とかミッションでは生き残る。

イアン・ジャクソン

36歳 ビースト ポジション：高橋

女性の稼ぎで生計を立てるヒモで、ミレイナとは腐れ縁。酔っ払い運転の車にはねられてガンツに召喚される。身体能力は平均値く

らいたが、アダムらとともに経験を積んできた事でそれなりに成長を見せた。黒服星人ミツシヨンを生き残るが、ミレイナを失って悲しみにくれる。

ミレイナ・レナード

38歳 キャスト ポジシヨン：坂野

昼は介護師、夜はホステスのガンツメンバー。イアンと共にはねられガンツに召喚される。少女の様な見た目だが実年齢は30代後半である。黒服星人ミツシヨンで、黒服・参に頸動脈を斬られて命を落とす

デレク・クライア

42歳 ビースト ポジシヨン：小林

GRMでシステムエンジニアを務める男性。ハルに殺されガンツに再召喚された卒業生。殺伐とした戦場でも営業口調が抜けない生真面目な男。

ロバート・ジャン

29歳 ニューマン ポジシヨン：中村

アフロヘアーが特徴的な美容師。ハルに殺されてガンツ部屋に戻ってきた卒業生。黒い玉に『特徴：うるさい』と言わしめたとおり、声が大きくやかましい。

ルーシー・メイ

17歳 ヒューマン ポジション：山本

ニューデイズの高校に通う女子高生。卒業生で、地下鉄でハルに突き飛ばされ、電車にひかれてガッツに再召喚される。エミリアほどではないが頭はかなりいい方。×ウィップを難なく使いこなすほどの戦闘技術を持つ。

キャラ紹介 その2（後書き）

えゝ、次の更新はいつになるかわかりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0014t/>

PHANTASY STAR GANTZ PERFECT ANSWER

2011年11月14日22時49分発行